帝国の狂戦士は反帝国組織の聖女を殺したかった

さや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
帝国の狂戦士は反帝国組織の聖女を殺したかった

【Ｎコード】
Ｎ１１２２Ｘ

【作者名】
さや

【あらすじ】
大陸統一を目標に掲げる巨大帝国に超常の力を持つ一人の狂戦士がいた。
皇帝の駒として日々殺戮を繰り返す彼の前に、ある日、反帝国組織の聖女が立ちはだかる。
狂戦士は聖女を皇帝の敵として、聖女は狂戦士を仲間の仇として互いに互いの存在を憎悪した。
これは、一つの革命の裏に消え去った小さな悲劇の物語。

彼という人間

「…殺さなきゃ。」

それが、彼が彼になってから初めて発した言葉。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

大陸統一に向けて日々戦争を繰り返す帝国に、一人の狂戦士がいた。

真っ白な髪に真っ赤な瞳。年のころは二十ほどの青年。

頬に飛び散った赤黒い液体をペロリと舐め取って、その表情を愉悦に染める。

目の前の人間たちが逃げ惑い絶望に顔を歪ませる様を、彼は心から楽しんでいた。

「いひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！どいつもこいつも死ねっ！死ねぇーー！

いひひひひひゃーっはっはっはっは！」

圧倒的なスピードとパワー、そして狂気。
全身甲冑に身を包んだ兵士たちを狂戦士はまるで紙でも千切るかのように素手でバラバラに引き裂いていく。
真っ赤な装飾の施された無残な屍が、大地を覆い隠すように積み重なっていた。
もはや動く者すべてが彼の標的となり、戦場は阿鼻叫喚の地獄絵図と化している。
この場に彼を止められる者は誰一人として存在しない。
もぎ取った生首を三つ、お手玉のように両手でポンポンと飛ばしながら、狂戦士は恍惚とした表情を見せた。

「楽しいなぁー。ボクちんってば、人を殺している時が一番幸せだなぁー。
うふっ。くふふふ。ふひひひひひひはは―っ！」

笑いながら、より遠くを逃げる人間から順に生首を投げつけると、その衝撃のあまりの強さに双方がバラバラに弾け飛んだ。
およそ人間としてあり得ない能力を持つ彼は、帝国の研究によって造り出されたバイオコマンドである。
実験の唯一の成功例である狂戦士は、その壊れた精神に目を瞑って有り余る利益を帝国にもたらしていた。
万を超える軍勢を前にしても、彼はその身にかすり傷ひとつ負うことは無い。
殲滅を目的とした戦場に投入すれば、結末の行方を疑う者はいなかった。

「……あっれー？なんだー、もう終わりかぁ。
まだ全然満足できてないのにぃ。つまーんなーい、つまーんなーい、つまーんなーいなぁーっと。
ま。終わったものはしょーがないから、かーえろっ。」

瞬間、何かが爆発する様な大きな音が轟いて、戦場から狂戦士が消えた。
抉れた地面と血だまりに沈む肉塊が静かに風にあおられていた。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「ねー、へーかー。こーてーへーかー。今度のところは人数も質も悪かったんだよー。
すぐ次を用意して欲しいなー、ボクちん。ねー、いーでしょ、へーかー。ねー。」

赤く染まった全身を拭う事もせず、帝国の頂点に立つ現皇帝の執務室へと足を踏み入れた狂戦士は子供のように催促を繰り返していた。
部屋の隅に控えていた侍従たちは、顔を真っ青にさせ彼という存在に怯えている。
執務室の扉の前には、原型が分からないほどグチャグチャに潰さ

れた警備兵だったものが転がっていた。
皇帝はところどころに白の混ざったグレーの髪をかき上げながら、ため息交じりに口を開く。

「今日警備についていた騎士達は、それなりに貴重な人材だったんだがな…。」
「そんなの知らないよぉー！アイツらがボクちんの行く手を遮ったのがイケナイんじゃないさー！
そんなこといーからへーか！ホラ、早く次のトコローー！」

パンパンと両手を叩きながら再び催促を繰り返す狂戦士。
反省の色の全く見えない彼の様子を前に、皇帝は眉間に皺を寄せスッと目を細めた。

「…それに、その格好は何だ？
余の前では常に身なりを整えておけと命令しておいたはずだが？」
「もーっ！へーかってば、細かい！またすぐに汚れるんだからいいでしょーっ？」

彼の中ではもう出撃は決定事項のようである。
皇帝はその言葉にピクリと片眉を上げて、苦々しげな声で言った。

「まだ次を用意すると言っておらんだろう…。
今はお前に提供してやれるような戦場は無い。大人しく待機していろ。」

「えぇ何、ダメなの！？やだやだ、そんなのやだ！へーかのケチ！ドケチ！
ボクちん、おさまりがつかないったらないよー！足りないー、足ありぃなぁいぃー！」

両拳を握りしめブンブンと顔を横に振りながら喚く狂戦士を前に、皇帝は渋い顔をして額に手を当て俯きつつ妥協案を述べた。

「本当に今日はもう無理だ…。
足りないと言うのなら、先日捕まえた反帝国組織の者が数名いるからソレで手を打て。」
「うぅー、もー。しかたないなぁー。今回は我慢してあげるよー、へーかー。
ボクちんってばぁー、こーてーへーかの従順なお狗様だもんねー！きゃきゃきゃきゃきゃきゃ！」

どこが従順なのかと返したい気持ちをグッと堪えて、ひとつため息を吐くに止める。
深く精神が疲労するのを感じながら、最後にこれだけは伝えなければと皇帝は口を開いた。

「……あと数日で今日より何倍も質の良い狩り場を提供できるだろう。
頼むから、それまでは城内で余計な問題を起こしてくれるな。」
「起こさない起こさない！でもぉー、最低でも一日五人はオヤツとして用意しておいてくれないとぉー、ちゃんとは約束できないかも

ー？くひっ。
んじゃ、早速ボクちんは地下で遊んでくるよーん。いひひひひひひーっひっひっひっひ…。」

耳にした者の思考までも狂わせるような不気味な笑い声を響かせながら、狂戦士は執務室から去って行く。
入れ替わるようにやって来た老齢の宰相は、至極冷静な態度で『被害が少なくて重畳でしたな』などと呟いて、テキパキと侍従の入れ替えや死体処理、警備兵の補充などを指示していた。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

皇城の中でも特に厚い壁と扉に守られたとある会議室。
そこで、皇帝を始めとした帝国の重鎮たちが、近年ますます勢力を増す反帝国組織の存在に頭を悩ませていた。

「襲撃の軌跡から考えるに、次に狙われるのはおそらくリャンガでしょう。」

年齢を感じさせぬ引き締まった肉体を持つ壮年の帝国軍元帥が、重々しく口を開く。

それを引き継いで、諜報に長けた公爵家の老人が腕を組み目を細めながら自らの情報を開示した。

「何でも聖女と呼ばれる十六、七の娘がおよそ人とは思えぬ怪力を発揮して組織を勝利に導いておるとか…。」

「何だそれは…。眉つばでは無いのか？」

日々情勢の変わる帝国において否応なく働き続け、今にもノイローゼに陥りそうな財務会計担当である小太りの公爵が怪訝な顔で老人を見る。

老人は情報を疑われた事が癇に障ったらしく、睨みつけるだけでそれ以上何も語ろうとはしない。

そんな二人の様子を見かねて、宰相が口を挟んだ。

「しかし、現在確認出来ている十倍の規模の反乱分子が存在したと仮定しても、そう易々と落とされる帝国軍ではありませんぞ。

私の部下からも同じような報告が届いている以上、まるきり間違いだという事も無いでしょう。」

宰相の言葉にようやく納得した様子の財務会計担当と、その様子に軽く留飲を下げた老人。

すると、今度はまた別の場所で火花が散った。

狂戦士を造り出した研究部の責任者である三大公爵家の最後の一人である青年に、元帥が剣呑な目を向けて吐き捨てるように言う。

「ふん。化け物のような怪力とは、まるでどこかで聞いた様な話ではないか。
研究部は情報管理もろくに出来ぬ痴れ者揃いと見える。
おかげで、我が軍の優秀な兵たちが無駄に散ってしまったぞ。
失態を犯した研究部は、この責任をどう取られるおつもりかね。」
「これはこれは、元帥殿。己の無能を棚に上げて責任転嫁ですかな？」
「なんだと…？」

髪をサッとかき上げつつ放たれた青年の煽りに対し、殺気をまき散らしながら椅子から立ち上がる元帥。
それを諌めたのは、この場の最高権力者である皇帝であった。

「不毛な諍いを起こすな。時間の無駄だ。
最も…、お前たちが反帝国組織の手の者であると言うのならば話は別だが…？」

内容に反してどこまでも静かな皇帝の声に、その場にいた誰もが背筋に冷たいものを感じて黙り込んだ。
いきり立っていた元帥も、顔を青くし緩やかに椅子に腰を下ろす。

重苦しい空気の中、再び会議を進めるべく口火を切ったのは宰相だった。
ゴホンとひとつ咳払いをし、自らに注目を集めて彼は慎重に口を開く。

「…では、リャンガ防衛において最大の障害となるであろう聖女への対策について、僭越ながら私の考えを述べさせていただきましょう。」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

後日、新たな情報を元に一つの結論を導き出した同メンバーは、それぞれ重苦しい空気を纏いながら静かに椅子に座っていた。
異様な沈黙が続く会議室。
そこへ、いっそ破壊を目的としているのではないかと疑いたくなるような勢いで扉を押し開いて、一人の闖入者が現れる。
重鎮たちは揃って眉を顰めながら、視線を出入り口へと向けた。

「へーかー、呼んだぁー？あっひゃひゃひゃ！
もしかしてー、ついにぃー、出撃命令ぃー？だったら、いーなー！
ボクちん、もう待ちくたびれちゃったよぉー！」

言いつつ、ずかずかと皇帝の元へ歩み寄る狂戦士。
見れば、彼はなぜか片手で上半身のみとなった人間を引きずっており、その死体の千切れた腹部から未だ零れる赤が床をしとどに濡らしていた。

それに腹を立てたのは財務会計担当の小太り公爵である。

「なっ！貴様、帝国最高会議室を下賤な血で穢すとは何事だ！
いや、それよりも！皇帝陛下に対して何という口の利き方をしている！」
「はん？」

瞬間、皇帝と当の小太り公爵を除く全ての人間が息を飲んだ。
この場で狂戦士の脅威を理解していないのは、今まで実際に彼を目の当たりにした事のない公爵だけである。
なまじ言葉が通じるだけに一見して彼の狂気を理解できる者は少ないが、それでも同じ部屋に五分といれば、その異常性は嫌と言うほど骨身に刻まれるだろう。

いくら公爵などという高位の身分を持つ存在であっても、皇帝以外は全て等しく殺害対象である狂戦士からしてみれば、自分の話の邪魔をした鬱陶しい男という認識でしかない。
その独特の感覚で例えるならば、眼前を飛び回るハエのようなものであろうか。
そんなハエ同然の男にチラリと視線をやって、彼は小さく笑いながら皇帝に訪ねた。

「なはは。へーかー、何このブタぁー。妙にうるさいんだけど殺していいのー？
って、よく見たら他にもいるねぇ。だったら、一人二人減っても大丈夫かなー？きひっ。」

それを聞いて、自らに被害が及ぶ事を怖れた他の重鎮たちは、揃って不用意な発言をした小太り公爵に恨みがましげな視線を送る。
そんな周囲からの視線にも気がつかずに、彼はブタ呼ばわりされた事に対してさらに声を荒げていた。
皇帝は、それらを全て無視して狂戦士へ向き直る。

「我慢しろ。これらは皆、帝国に必要な人材だ。」
「えーっ！」
「…そう不満気な声を出すな。
お前の期待通り出撃命令を下してやろうと言うのだ。
今、敢えてこの者たちでなければならぬ理由もあるまい。」
「なぁんだ、へーか。それならそうと早く言ってよー！あひゃひゃひゃ！
じゃ、これはもういらないや。」

言うと同時に、狂戦士は手の中の死体を適当に放り投げる。
だが、その行動を目で追えた者は無く、グチュリという嫌な音が耳に届いて振り向いた時には、すでに死体は潰れた状態で壁にベッタリと張り付いていた。
比較的重みのある部分からゆっくりと地面へ肉が落ちていく。
間もなく部屋中に生臭い血液の香りが充満して、戦経験のない小太り公爵が顔を青白くしてこみ上げるモノを堪えるように口に手を当てた。

再び静まり返った会議室に、皇帝の冷静な声が響く。

「今回の標的は、リャンガ制圧を狙う反帝国組織の者たちだ。
その中に、聖女マリアと呼ばれる金髪金目の１６，７の娘がいる。
彼の者だけは何があっても確実に仕留めろ。
だが、女だからと言って油断はするなよ。聖女はお前と同じような超常の力を持っているそうだ。」
「うえぇ～。せーじょだってぇー、気持ち悪ーい！
ていうかー、ボクちんと同じ力とかってぇ、生意気じゃなぁーい？なんちゃってぇー！いはははは！
とりあえずー、ボクちんの殺しの邪魔をするやつはみんな死んじゃえばいいと思いまーす！ひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！」

狂戦士の態度に皇帝は軽く自らの眉間を揉みながら、さらに会話を続けた。

「ひとつ訪ねたいのだが…。
今回は常とは違いリャンガごと滅せば良いというわけにはいかんのだ。
彼の民を生かし、都市に被害を出さずに、反帝国組織の者だけを相手にする事は可能か。」
「やはははははははははは！
そんなの無理だって、へーかが一番良く知ってるじゃないー！
なに言ってんのぉー！ぷはーはは！あー、おっかしぃー！」

腹を抱えて心底面白そうに笑う狂戦士を前に、皇帝は難しい顔をして黙り込んだ。

他の重鎮たちも、頭を抱えたりため息をついたりしながら苦渋に満ちた表情で口を噤んでいる。

リャンガは鉄鋼業の栄える、帝国にとってもかなり重要な工業都市である。

それゆえ、反帝国組織に奪われ利用されることだけは避けなければならない。

しかし、聖女の存在が実際に確認された今、通常の兵をいくら配置したところで結果は目に見えていた。

そして、長い話し合いの末、狂戦士を投入し都市ごと消滅させるという結論に至ったのである。

帝国にとっても最悪ではないというだけの手痛い選択ではあったが、これで聖女さえいなくなってしまえば後は通常の軍でどうとでもなるだろうという自信があった。

リャンガは大陸統一を成すためのやむを得ない犠牲であるのだと自らを納得させつつも、実際にそのような手段しか取れない事を彼らは胸の内で情けなく思わずにはいられなかった。

ひとしきり笑い終わった狂戦士は、今度は薄ら笑いを貼り付けてとある提案をしてきた。

今までにない事を口にする彼に、その場にいた全員が揃って目を見開く。

「でさー、へーかー。そんなに殺させたくないならぁー、せーじょだけでも別の場所に行かざるを得ないような情報を流すとかしたらどーなのー？

そいつがいなかったら、別にそっちで対応できるんでしょー？ひ

ゃひゃっ！
面白そーだから、ボクちん今回はそのせーじょってヤツを殺せればいーよー。
まー、拍子抜けってくらい弱かったら、その時はどうなるかわかんないケドぉー！いはははは！」

それは実に渡りに船な内容だった。
普段、数千規模の戦に駆り出そうとも、敵の如何（いかん）によっては足りないと言って目につく者を端からその手にかける彼の言葉とはとても思えない。
狂戦士の相手には比較的慣れている皇帝もこれには大層驚いてしまい、普段であれば自らの中で結論を出したであろう愚問を投げかけてしまう。

「…情報を流す？お前に何か策があると言うのか？」
「ぶはっ！まっさかー！考えるのは、そっちの仕事じゃーん？
ボクちんはぁ、殺すだけーっ！きひひひひ。」
「あ…。あぁ、そうか。そうだな。
詳細な作戦については、こちらですぐにでも検討しよう。
お前は、いつでも出られるように自室で待機していろ。」
「はいはーい！なるべく早くね、へーかー！ひひっ！」
やー、楽しみだなぁー。せーじょってぇ、どんな肉の色をしているんだろー？ふっ、くふふふ。」

今にも踊りだしそうな軽快な足取りで会議室を去って行く狂戦士。
扉の閉まる音でようやく正気に返った面々は、いまだ狐につままれたような思いに捕らわれながらも、即座に思考を切り替えリャン

ガ防衛の策を固めていくのであった。

カケラの行方

彼女を視界に入れた瞬間、正体不明の不快感が全身を駆け廻り狂戦士は眉を顰めた。
だが、その感覚もすぐに治まり、今度は興味深げに目の前の女を観察する。

「白髪赤眼…。
お前が帝国の狂戦士か。」

リャンガから機馬(キバ)で五日ほどの位置にある湖の畔で、狂戦士と聖女が正面から対峙していた。
事前の情報通り、みつあみに結った腰まであるサラリとした金の髪を揺らしながら、同じく金の瞳で聖女は狂戦士を睨みつけている。
彼女の背後には連れ立って来たのであろう反帝国組織のメンバー十数人が控えており、一方の彼の背後には案内役として追従していた下級兵士が一人、いつでも離脱できるよう機馬に跨った状態で成り行きを監視していた。

狂戦士には珍しく、一言も口を開かず己に射殺さんばかりの視線を向けてくる聖女をただジッと眺めている。
今まで人間からこんなにも真っ直ぐに殺意を向けられた事のない彼は、肌に当たるピリピリとした空気を内心で楽しんでいた。
その感情のまま口の端を引き上げると、聖女はギリと歯を軋ませ

て吐き捨てるように言う。

「同士の仇…。そして、無力な女性や子供を見境無く手にかけたその大罪…。
貴様の死をもって償ってもらう！」

叫ぶと同時に、彼女は地面を蹴って狂戦士に殴りかかった。
戦闘スタイルは互いに素手である。
彼らの力に耐えうる強度を持つ武器が存在しないためだ。
そんな聖女の拳を難なくかわしながら、彼は堪え切れずに笑いをこぼす。

「くっ。ひひっ。せーじょってぇ、面白い事を言うんだねー。うひゃひゃっ。
ねーねー、相手が無力じゃなかったらぁ、何人殺しても罪にはならないのー？はははは！」

瞬間、聖女の動きが明らかに鈍った。
狂戦士が軽く放った蹴りをきっかけに、後方に跳躍し距離をとる。
着地し顔を上げた彼女の表情は泣きそうに歪んでいた。先程までの殺気も今は影を潜めている。

元より、平和のためにその身を投げ出した彼女である。
例え敵であっても、多くの人間の命を奪う事は酷く苦痛でならなかった。

それでも大義のためだと自分を無理やり納得させていたのだが、狂戦士の問いはそんな彼女の心の傷を容赦無く抉ってきた。

「ねー、教えてよー。罪にはならないのぉー、せーじょさまー？いひっ、いひひひ！

あーっはっはっはっはっはっはっは！」

「……まれ。…黙れ。黙れ！黙れぇ！！」

滅茶苦茶に襲いかかって来る彼女に対して、笑いを止めどこか冷めた風な瞳を向け防御に徹する狂戦士。

周囲の人間達から見れば彼らの攻防は肉薄しているようであったが、実際は狂戦士と聖女の間には殺人における技能も経験も、そして何よりその精神に大きく開きがあった。

攻撃がかすりもしない事に焦り懸命に手数を増やすも、彼には一向に届かない。

呆れた様に小さく息をついて、狂戦士は聖女の両腕をガッと掴んだ。

痛みを堪え、歯を食いしばって彼の手から逃れようと力を込めるが、まるで握り潰すことが目的であるかのごとく凶悪な握力を発揮され、聖女は己の無力を悟らざるを得なかった。

「…っぐ。放…せっ。」

「あーぁ。結局、せーじょなんて言ってもただの人間かぁ。

確かに力だけなら、それなりにボクちんに迫ってるみたいだけどー…。」

それから音も無く目の前から狂戦士の姿が消えたかと思うと、彼女の背後から声が響く。

「拙(つたな)いね。」

言って、狂戦士は聖女の背を思い切り蹴りつけた。
鈍い音と共に勢い良く飛ばされた彼女の身は木々をへし折りながら減速し、林を抜けた先の平原で幾度もバウンドを繰り返した後、ようやく地面に擦られながら停止する。
バイオコマンドの真の恐ろしさは、その超人的な怪力よりも回復力の異常な高さにあった。
聖女の肉体がグジュグジュと音を立てながら折れた背骨と傷ついた皮膚を修復していく。
狂戦士は瞬間移動さながらの速度で未だ地に転がる聖女の元へと走り、彼女の修復中である背を無慈悲に踏みつけた。
反射的に返って来た呻き声を気にも留めず、彼は言う。

「そんな脆弱な心で、その身体は扱えないよー？
このまま片付けちゃってもいいけどー、今のままじゃボクちんちょっと消化不良かなぁ。
先に、小うるさいお仲間でもつまんじゃうー？ふっ、くふふふ。」
「やめっ…あぁぁあああああ！」

血を吐きながらも仲間の身を案じる聖女を、その背を更に強く踏み込むことで遮る。
ついと顔を上げた彼の視線の先では、後を追って来た反帝国組織

の面々が必死な顔で聖女の名を呼んでいた。
だが、狂戦士に恐れをなしてか、誰もある一定以上から近付いて来ようとはしない。
再び視線を落として、無理にでも起き上がろうと足掻いている聖女の様子を観察する。

狂戦士は彼女の背からゆっくりと足を放して、そのまま地面から僅かに浮いた彼女の頭を躊躇なく蹴った。
ゴキリという首の骨の折れる音と同時に、聖女が数十メートル先の切り立った崖の側面に埋まり消える。
普通の人間ならとうに死んでいる威力の攻撃だが、彼らは体内のどこかに存在する特殊臓器を跡形も無く潰してしまわない限り再生し続けるという性質を持っていた。

自らの肉体について誰より理解している狂戦士は、当然彼女に追い打ちをかける予定だったのだが…。
彼はなぜかそれをせずに、とあるものを見つめて固まっている。

飛ばされる際に、聖女の胸元から小さな首飾りが落ちた。
その首飾りは中央がロケットになっていたようで、落下の衝撃でパカリと蓋が開いていた。
中にはダークブラウンの髪と瞳を持つ優しげな微笑みを浮かべた少年の肖像画が描かれている。

狂戦士はその肖像を視界に入れると、薄ら笑いを止めて彫像のごとき無表情へと変わった。

しばらくそのまま佇んでいたが、聖女が崖下から息も絶え絶えに這い出て来ると顔をそちらに向けて小さく息をつく。

「…やーめた。」

そう呟いて、狂戦士はサッと踵を返した。
突然の事に戸惑いを隠せずにいる人間達に気だるげな顔を向けて、彼は手をひらひらとふりながら告げる。

「なぁーんかー。ボクちん頭痛いから帰るー。
そこの君。あと、よろしくぅー。」

案内役の下級兵士を指差し、彼の反応を待たずして狂戦士はその場から消えるように離脱する。
前代未聞の有り得ない出来事を前にして、当の下級兵士はただ呆然とするしかなかった。

未だかつて彼が獲物を前に殺害以外の行動を取った事は無い。
元々、暴走した狂戦士に殺される事を前提とした使い捨て要員であった下級兵士にまともな判断などつくはずもなく、ただ混乱の中で彼は抵抗する間もなく反帝国組織に捕えられてしまうのだった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

狂戦士が彼女を発見したのは、その帰り道での事だった。
周囲に何も無い荒野で十三、四歳ほどの黒髪の少女が一人蹲ってすすり泣いている。
普段の彼なら、路傍の石と同様に視界にすら入らないか、目についたとしても次の瞬間には手にかけているところである。
ゆえに、彼がその少女に話しかけたのは全くの気まぐれに他ならなかった。

「ねー。お前、こんなトコで何してんのー？もしかしてぇ、ユーレーかなんかー？
なんてねぇー！無い無い！ボクちんユーレーとか信じてないしー！うはは！」

狂戦士の声に一瞬ビクッと身体をはねさせて、少女は怖々と上半身を起こした。
何を思ったのか、彼は少女の眼と鼻の先に己の顔を寄せてジッと観察を始める。
そのあまりの近さに彼女が反射的に背をのけぞらせて距離をとれば、狂戦士は少女の態度を気にした風も無く先ほどと同じ質問を投げかけた。

「でぇ、何してんのー？」

少女はハァとひとつ息を吐いて気を静め、目の前の男に視線を向けて口を開く。

「…何も。リナは、お父さんと…お母さんに……捨てられた…の。」

事実を口にしたことで再び悲しみに襲われた彼女の瞳が涙で滲んで行く。

だが、そんな事はお構い無しに狂戦士は少女を指差してこう言い放った。

「え！お前、捨てられちゃってんのー！？

うっは、何だソレ！みじめぇー！笑えるぅー！いひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！」

予想外に爆笑し始めた狂戦士を、ポカンとした表情で見つめる少女。

彼女は泣きたい気分であった事も忘れて、腹を抱え楽しそうに笑い続ける彼をただ眺めていた。

ひとしきり笑い終わった後に、狂戦士は彼らしくも無いとある提案を口にする。

「あぁー、笑った笑った。
ところでさー、行くトコ無いんだったらボクちんが飼ってやろうか？」
「へ？…か…飼う？」

目をまん丸くさせて言葉を復唱する少女に、ニヤニヤとした笑みを張り付ける狂戦士。

「そーそー。えーと、リナだっけぇー？
お前さー、ボクちんが飼ってやるからぁ、換わりにボクちんの面倒見てよー。」
「意味が分からない…。」

怪訝な顔で少女がそう呟くと、彼はパンパンと己の膝を叩きながら面倒臭そうにこう言い放った。

「だぁかぁらー！餌と寝床を提供するから、ボクちんの身の回りの世話をしてって事ぉー！」
「…え、あ、あぁ。」

ようやく彼の話を少し理解できたのか、小さく頷く少女。
つかめない性格をしているようだが、いかにも人を見下したような物言いや細かな刺繍の施された高級そうな服装から、おそらくそれなりに身分のある人間なのだろうということが窺い知れる。

このまま荒野に置き去りにされるよりは、言動は多少おかしくとも彼の案を受け入れた方が、飢え死にすることも、まかり間違って蛮族に襲われたり娼館に売られたりすることも無いだろう。
頭の中でそんな事を考えつつ、しばらく無言で狂戦士の顔を見つめた後、彼女は覚悟を決めたように自らの拳に力を入れ頭を下げた。

「お…、お願いします…。」

それを満足気に見つめながら頷いていた狂戦士は、突如何かに気付いたかのような声を上げる。

「あ！」
「え？」

戦々恐々と次の言葉を待つ彼女とは逆に、狂戦士は軽い冗談のように笑いながらとんでもない発言をかました。

「そーそー。なんてーかー、うっかり殺しちゃったら、その時はゴメンねー？ひひ。
いやぁー、もーね。ボクちんそういうのしょっちゅうだからぁー。
この前へーかにも、お前のせいで侍女が足りないーなんて怒られちゃってさー！けきゃきゃきゃ！」
「こっ、殺っ！？」

彼の言葉を聞いて、早くも己の決断を後悔せずにはいられない少女であった。

この後、連れられて行った先が皇城であったり、そこでいきなり皇帝の前につき出されたり、彼の正体が狂戦士であることを知ったりと、彼女の身に許容量を大幅に超える出来事が連続で起こるのだが、逆に何事にも動じない度胸を手に入れて彼の元で逞しく侍女業に精を出す事になる。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

狂戦士が討つべき聖女を放置し帰還した事によって、リャンガ防衛は回復し駆けつけた彼女の力によってあと一歩といったところで戦況をひっくり返され失敗し、制圧された。

元々圧政を強いる帝国に憤りを感じていたリャンガの民は反帝国組織を歓迎し、彼らの協力によって組織の技術力は大幅に上昇する。

その結果に多くの者は憤ったが、皇帝は意外にも狂戦士を責める事は無かった。

また、本来なら何らかの罰が執行されておかしくない状況でありながら、彼のこれまでの功績や聖女に唯一対抗できる戦力であるという事実、何より彼の性格が考慮され、お咎め無しとの決が下る。

これもまた人々の狂戦士に対する不満を募らせる要因となったのだが、正面からそれを本人にぶつけられる者があるはずもなく、皇城はどことなく不穏な空気に包まれる事となる。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

本人が拾って来たとは言え、すぐ死体に変わるだろうという理由から、リナは皇城で働く事をあっさりと許された。

しかし、大方の予想を裏切って、彼女は怪我一つすることなくもう幾日も彼の世話を続けている。

乾いた血液がこびりつきそこかしこが赤黒く染まっている部屋を懸命に掃除しながら、ふとリナは顔を上げて退屈そうにベッドに転がっている狂戦士に声をかけた。

「そういえば、狂戦士様のお名前は何とおっしゃるのですか？
お仕えする方に呼び名がありませんと、どうにも不便で。」

狂戦士専属とは言え、皇城で働く侍女としてリナは一通りの教育を受けさせられていた。

追い出されてはたまらないと懸命に言葉づかいや作法を覚えたの

だが、彼女がどう変わろうと全く反応を見せない狂戦士相手では、つい気が緩み今回のように身分を越えて気軽に話しかけたり時には仕事を手伝わせたりと侍女にあるまじき態度を取ってしまう。
声をかけられた狂戦士は、特に彼女に視線を合わせるでもなく天井を見詰めたまま答えを返した。

「んー？
別にぃ、ボクちん名前とかって無いしー。リナの好きに呼んでいーよー。
そのまんま狂戦士でも被検体２１３号でも、ペットらしくご主人様でもー。きひひっ。」

元々は彼もただの人間であり当然のごとく名も存在したはずなのだが、拷問にも等しい実験を繰り返される中でいつしか過去の記憶は全て失われていた。
副作用から来るものか心労から来るものかは分からないが、ある日を境に彼の頭髪の色素は失われ、その瞳は血液を集めたかのような真っ赤な色に変化する。
容姿の変貌に加え、さらに、帝国は非情にも狂戦士の故郷である小さな村を当の本人に試験的に襲わせ滅ぼしているため、すでに彼の本名を知る者は存在しない。

そんな背景をリナが知るはずもないのだが、狂戦士本人が名の無い事実を気にしている風も無いので敢えて追及する事はしなかった。

「……では、狂戦士から取りましてキョウ様と呼ばせていただきま

す。」
「ひひ、キョー様ねー。
なぁんかー、人間と間違われそうな呼び名でいいんじゃなーい？
いひゃひゃひゃ！」

彼の言葉の本意が分からずにリナは小さく眉を顰める。
何が楽しいのか、狂戦士はそれからしばらく彼女の決めた呼び名を呟いては一人ケタケタと笑い続けるのだった。

～～～～～～～～～～～～

相変わらず戦場ではその異常性を如何なく発揮する狂戦士だったが、リナが世話係になってからというもの、待機の間にオヤツと称して人命を弄ぶことは無くなっていた。
しかし、その一方で、聖女に対して並々ならぬ敵愾心を露わにするようになった。
一度は自ら殺害の機会を手放しておきながら、アレは自分の獲物であると豪語する彼の姿に皇帝含む重鎮たちは首を捻らずにはいられない。

とは言え、狂人の理屈を理解できるとは彼らも考えてはいなかった。

本人の望み通り聖女を始末させようとすれば、リャンガ制圧以後、優秀なブレインが参入したらしい反帝国組織の巧妙な情報操作により出現場所の特定が困難となっていた。
おそらく、狂戦士に手も足も出ず嬲られたことで、万一にも聖女を失う可能性に気付き、これを恐れたのであろう。

さらに、反帝国組織はその勢力を急激に増大させ、複数都市の同時強襲や時には綿密な内部工作による無血開城などにより、次々と帝国の重要都市を落としていく。

強大な力を持つ狂戦士を抱えているとはいえ、彼はたった一人であり、複数の場所に同時に存在することはできない。
大陸統一に王手をかけながら、帝国は次第に窮地に立たされるようになっていったのである。

カケラの行方（後書き）

※機馬…バイクのようなもの。

ストロベリームーン

狂戦士はリナを探して皇城内を忙しなく駆け回っていた。
ほどなくして、彼は目的の人物を発見する。

「あっ、いたいた。リナぁー。」

言いながら、狂戦士は廊下の端でリナと会話をしていた女官の頭を掴んで壁に叩きつけた。
そうした事に特に理由はなく、単にリナと話をするのに邪魔であったから無意識に除けたというだけの行動である。
弾け飛んだ女官の頭蓋骨の破片が彼女の頬を掠り、薄く血が滲んだ。
リナはただため息をひとつ吐きながら、侍女服のポケットからハンカチを取り出して己の身に降りかかったモノをサッと拭っていく。
あまりに日常的に行われる殺人に、彼女はいつしかすっかり慣れきってしまっていた。

おそらく自分も少しずつ狂っていっているのだろうと考えるリナだったが、さりとて彼から離れようとは思わない。
一人になると途端に様々な人間から様々な手法で嫌がらせを受ける彼女からしてみれば、狂戦士の傍らは疲れはしても、それ以上に安心感を与えられる場所であり、唯一の心の拠り所であった。
先ほどと反対側のポケットからもう一枚ハンカチを出して、今度

は狂戦士に付着した汚れを丁寧に拭いながら不満気な顔で話しかける。

「キョウ様。貴方の不始末は全て私一人で片付けるよう言い渡されております。
気ままに死体を増やす事はくれぐれもお慎み下さいと、もう何度もお願い申しあげたはずですが…。」
「そーだったっけー？覚えてなぁーい！やはははは！」

何ら気にした風も無い狂戦士に、リナは諦めるようにため息をついて半目で彼を見つつ言った。

「…それで、一体私に何の用事でしょう？」
「あっ、そーそー！
ボクちん出撃命令賜っちゃったからぁー、ご飯いらなーい！ひひっ。」

彼の言葉に、彼女は小さく眉を顰める。
その立場からどうしても情報に疎くなりがちなリナは、以前と比べ格段に狂戦士の出撃回数が増えた事で酷く不安をかき立てられていた。

「また…ですか。最近、いやに多くありません？大丈夫なんですか？」
「意味分かんないー。多いとかぁ、普通に嬉しいだけだしぃー！ひ

ゃはははは！」
「そうですか…。詮無い事を申しました。
いってらっしゃいませ。くれぐれもお気をつけて…。」
「あひゃひゃひゃひゃひゃ！じゃーねー！」

言うなり、狂戦士は近場の窓から戦場へ一足飛びに駆けて行く。
リナはその窓をそっと閉じながら、静かに空を見上げ彼の無事を祈るのだった。

～～～～～～～～～～～～

それからさらに数ヶ月が経った。
反帝国組織との争いが激化する中で、聖女の情報を掴めそうだという理由で戦場から呼び戻されていた狂戦士が自室でこれでもかと暴れていた。
「あー！殺したい殺したい殺したい殺したい殺したい殺したい殺したいぃぃぃーーーっ！
待機なんて冗っ談じゃないよぉー！」
言いながら、彼は部屋の家具や調度品、果ては壁まで手当たり次

第に破壊していく。
報告を受け急いでやって来たリナは、そんな狂戦士の様子を見てピキリと額に血管を浮かび上がらせた。

「お止め下さい、キョウ様！あとで片付けるのは私なんですよ！無意味に暴れていないで、今の内にゆっくり睡眠でも取って鋭気を養って下さい！」
「えー、やだぁ！眠るの嫌いー！アタマ痛くなるー！」

リナに怒鳴られた途端、狂戦士はピタリと破壊活動を止め彼女に向かって言い返す。
深く息を吐いて気を落ちつけながら、リナは彼を説得するために口を開いた。

「何を子供の様な事を…。
ようやくキョウ様が殺したがっていた聖女の居場所が分かるのでしょう？
だったら、いつ命令が下されても良いように万全の態勢を整えておくのは当然です。
ホラ。片付けの邪魔ですから、さっさと寝台に入って下さい。」

彼の足元に散らばる壁の破片を拾いながら手でしっしと追いたてると、狂戦士は文句を言いつつも彼女の示す通り寝台へと向かって行く。

「……ちぇっ、寝るよ。寝ればいいんでしょー。
もー。横暴だなぁ、リナはー。
大体ぃー、ご主人さまに命令するペットってどうなのー？」

ふんふんと不貞腐れながらドサリとベッドに横になった狂戦士は、拗ねたようにリナに背を向ける。
そんな彼の姿に苦笑いを零しながら、彼女はその背に優しく囁いた。

「おやすみなさいませ、キョウ様。良い夢を…。」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「ゼルお兄ちゃん！」
「ルゥナ、どうした？」

パフリと腰に抱きついてきた妹に微笑みかけながら、ゼルナリオは彼女の栗色の髪を緩やかに撫でた。
それを嬉しそうに享受しながら、ルゥナリアは元気に要件を告げる。

「ルゥナね、お兄ちゃんにお昼ごはんを届けに来たの！
ゼルお兄ちゃんの好きな卵とお野菜のサンドイッチだよ！ルゥナも手伝ったんだから！」

キラキラと目を輝かせる妹の様子にさらに笑みを深くしながら、しかし、少しばかり困った顔でゼルナリオはそれに返答した。

「そっか。ありがとう、ルゥナ。
でも、その…僕にはルゥナが何も持っていないように見えるんだけど…。」
「あっ！」

慌てた様子で自分の両手を見つめた後、キョロキョロと辺りを見回すルゥナリア。
それから、ゼルナリオに向き直ると茫然とした顔で呟いた。

「…おうちに忘れて来ちゃった。」

ルゥナリアは小さく身体を震わせながら、くしゃりと表情を歪め目からポロポロと涙をこぼす。

「どうしよう。忘れて来ちゃったよぅ。
お兄ちゃんのお昼ごはん…。

うぇっ…ごめんなさい、ごめんなさいぃ。」
「あぁ、ルゥナ。泣かないで。僕なら大丈夫だから。」

地面に膝をついて、そっと泣き濡れる彼女を胸の内に抱き込みその背を撫ぜる。
ゼルナリオ15歳、ルゥナリア10歳の春の事だった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

深い月夜の晩、ごつごつとした岩場の隅に腰を下ろして聖女は一人空を見上げていた。

ふと、背後に見知った人間の気配を感じて、彼女は緩慢な動作で顔を向ける。
組織の同士であり、今最も彼女が信頼を置いている幹部の男がそこにいた。

「マリア。いくらお前が聖女だからと、単独行動は感心せんぞ。」

開口一番の小言に苦笑いしつつも、聖女は再び空へと視線を戻す。

「…すまない。
計画を前に少しばかり感傷的になっているようでな。」

いつも気丈な態度を崩さない彼女が、憂いるような表情をしている。
男は軽く腕を組み、聖女の側へと腰を下ろした。

「…どうした？
話ぐらいなら聞いてやるぞ。」

その言葉を聞いているのかいないのか、聖女はただ夜空を見上げ続けている。
しばらく沈黙が続いていたが、やがて彼女は独り言のようにポツリポツリと語り出した。

「皆には聖女なんて呼ばれているけれど、本当は私にそんな資格なんて無いんだ…。」

突然の告白に、男はピクリと片眉を上げて怪訝そうな顔を見せる。
まさかここに来て役割を放り出し逃げ出すつもりではないのかと、内心で彼女に疑いを持ったのだ。
多くの者から聖女と祭り上げられているが、いかんせんまだ年若い娘である。

また、組織の今後を決定付ける大事な計画を前にして、男の心には少しばかり焦りがあった。

「……何で、そう思う？」

彼の問いに、聖女は自嘲する様な笑みを浮かべる。
視線は空に固定されたままだ。

「虐げられている人々を助けたいだなんて、そんなの大嘘だ。
故郷を滅ぼしたあの狂戦士に復讐がしたい。ただそれだけのために、私は力を欲した。」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「見て見て、ゼルお兄ちゃん！
この前の十一歳のおたんじょうびに貰った首飾りにね、お兄ちゃんの絵を入れてもらったの！」

ロケットの中を開いて見せながら、ルゥナリアは兄の腕に絡みついた。

それを解くでもなく享受しながら、ゼルナリオは困惑した様子を見せる。
「え…。僕の？
確かに好きな絵を入れてもらえばいいと言ったけれど…。」
「だって、ルゥナが一番好きなのはゼルお兄ちゃんだもん！
それにね、これでお兄ちゃんがおうちにいない時でもずっと一緒みたいでしょ！」
「ルゥナ……。
ありがとう。僕もルゥナが一番大好きだよ。」
妹の言葉に感激したゼルナリオは、甘く微笑んでルゥナリアを抱きしめた。
傍にいた両親がまるで恋人同士のようだと苦笑いしていたのだが、抱擁中の二人の視界には入らない。
平穏で、そして、どこまでも幸せな空間がそこにはあった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「養父母の元から旅立つにあたって、真っ先に故郷を訪ねたよ。
当時子供だったとは言え、さすがに村の名前や大体の場所くらい

覚えていたからね。」

彼女はそこまで言って、ギュっと何かを堪えるように眉間に皺を寄せた。

男は黙ってただ聖女の語るに耳を傾けている。

「けれど、そこには何も無かった。…何も無かったんだ。

村を囲っていた柵も、家も、畑も、井戸も。そこに村があった痕跡はどこにも残っていなかった。

実は私の記憶の方が間違っていて、全てが夢だったんじゃないかと思ってしまうくらいにな…。

現実だと肯定できたのは、この首飾りがあったからだ。

それから私はどうして村が無くなったのか、村のみんなはどこに行ったのか、必死で情報を集めた。」

「そして、狂戦士に行きついた…と。

それで復讐か。」

フゥとひとつ息を吐きながら、男は納得したような表情で己の顎を撫で擦った。

そんな彼に強い瞳を向けて聖女はさらに言葉を重ねる。

「それだけじゃない。

復讐を成したら、帝国から助け出したい人がいる。」

「……そのロケットの男かい？」

聞かれて、彼女は目を細めながら己の首飾りをキュッと握りしめた。

「あぁ、そうだ。」
「恋人か？」

冗談交じりの男の問いに聖女はフッと小さく笑み、肩をすくめながら答える。

「残念ながら。」
「じゃあ、誰だ？」
「…兄だよ。私が十一歳の頃に帝国兵に連れ攫われてしまった。何もかもが急だったし、私はひどく混乱していたから、どんな理由で兄が彼らに捕まったのかは分からない。
けれど、あの人は本当に優しく、強い人だった。
二人で森へ逃げたあの時、完全に足手まといだった私のために兄は自ら…。」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「全て、国民は帝国に血液を献上せよ。

これは偉大なる皇帝陛下の勅命である。」

役人率いる研究師団が村を訪れたのは初夏の事。
村人たちはその目的も分からないまま、彼らに逆らうことなく自らの血を差し出した。

それが大きな間違いであったのだとゼルナリオが気がついたのは、同じ年の秋の終わり。
内密に反帝国組織に加入していた幼馴染である村長の息子からの密告だった。

「やぁ、久しぶり。どうしたんだい、そんなに慌てて。」
「暢気に挨拶している場合じゃない！
ゼルナリオ、一刻も早く妹を連れて村から逃げろ！」
「いきなり物騒だね…。何があった？」
「いいか、良く聞け。
帝国は恐ろしい改造兵士を作り出そうとしている。
あの有名な解体公爵のふざけた研究がついに実行段階まで進んじまったらしい。
血液献上の命はその実験の適合者を探すためのものだったんだ。
そして、ゼルナリオ。…お前とお前の妹は見事それに合格しちまった。」
「何だって…。」

聞けば、すでに帝国兵が間近まで迫っていると言う。
両親への説明を幼馴染に任せて、ゼルナリオは素早く旅支度を整

え妹の手を取ってこっそりと村から抜け出した。

「けして街道は使うな。スアルの森を越えてティティカの町へ向かえ。

俺の仲間がお前たちを保護してくれるはずだ。」

そんな彼の言葉通りに森へ足を踏み入れると、間もなく村の方向からいくつもの機馬の走行音が耳に届いて来る。

ゼルナリオは妹を抱き上げ足を速めつつ、自分たちが逃げた事によって罰せられてしまうのではないかと残された村人たちの身を案じるのだった。

「くそっ、まさか解体公爵が直接出張って来るなんて…。」

ゼルナリオの代わりにその身を帝国に投げ出そうとした幼馴染は、変態的研究者の解体公爵により血液の色が違うとあっさり正体を見抜かれてしまう。

また、問いかけに嘘で答えようとも、公爵の鋭い観察眼により小さな仕草から正答を導き出されてしまい時間稼ぎにもならない。

彼は悔しさに唇を噛み瞳に涙をにじませながら黙り込んだ。

「第三部隊から第五部隊は森を捜索、残りは村人を見張っていなさ

い。
兄の適合率８７％、妹に関しては驚異の９９％と出ています。必ず生け捕りにするのですよ。」

けたたましい機馬の音が森に近づいている事に気がついたゼルナリオは、一つの決意を固めた。

「いいかい、ルゥナ。今、僕らは帝国兵と言うとても悪い人たちに追われているんだ。
だから、彼らに捕まらないように森を抜けて安全な町まで行かないといけない。
ここまでは分かるかな？」
「うん。」
「いい子だ。
それで……僕は、今からその悪い人たちをやっつけて来ようと思う。
でも、悪い人たちはいっぱいいるから、僕はルゥナを守りきれないかもしれない。
だからね、ルゥナ。この荷物を持って、一人で森を抜けるんだ。
太陽の見える方向に歩けば、ルゥナの足でも夜には森から抜け出せる。」
「そんなのやだ！ゼルお兄ちゃんと一緒じゃないと、やだもん！」
「お願いだよ、ルゥナ。悪い人をみんなやっつけたら、絶対に迎えに行くから。
すぐに追いつくから。それまで…。ね、お願い。」

ぐずるルゥナリアを何とか説得して見送った後、ゼルナリオは細

剣を手に森を引き返した。
最愛の妹を守るため、彼は命を投げ出す覚悟で迫り来る帝国兵へと単身向かって行ったのである。

「ふむ。まぁ、一人手に入っただけでも良しとしますか。
それにしても、まだ年若い少年が下級とは言え我が軍の兵士を相手に互角以上とは…。
これは実験が今から楽しみですね。」

クスクスと笑いながら解体公爵は後方へ視線を伸ばす。
その視線の先で、死なない程度に痛めつけられ無残な姿へと変わり果てたゼルナリオが機馬に括りつけられていた。

「さて、陛下の意向に逆らった愚かな村人共の始末はどうしましょうかねぇ。
このまま他の適合者への見せしめに残らず処刑してしまっても良いのですが…。」

ふぅむ、と顎に指を当て小首を傾げる解体公爵。
しばらくして、彼はその顔にニヤニヤとした嫌らしい笑みを張り付けて言った。

「……いいことを思いつきました。とりあえず、今日はこのまま帰りましょう。
第一部隊は残って村人共が一人も逃げ出さないように見張っていなさい。
なに、早ければ来月にでも解放してさしあげますよ。」

太陽が沈んで間もなく、奇跡的に森を抜けた先でルゥナリアは力尽き倒れた。
そこへ偶然通りかかった隊商のとある夫婦に拾われ、彼女は以後彼らの娘として育てられる事になる。
肉体と精神を多大に消耗していたルゥナリアが目を覚ましたのは、それから二日ほどが経過した頃だった。
戻って来ると約束したはずの兄ゼルナリオは、当然ながらそこにはいない。

「お嬢ちゃん、お名前は？」
「……リア。」
「マリア？
マリアちゃんって言うの？」
「……。」

少しの間の後、彼女はこくりと頷く。
己の弱さのせいで兄を失ったのだと思い込んだルゥナリアは、名前と共に自身を捨てた。

誰よりも強くなって、いつか兄を迎えに行く事を自らの心に誓ったのだ。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ギュっと拳を握りしめて、聖女は声を震わせる。

「……兄は絶対に死んでいない。帝国兵なんかに殺される人じゃない。
だから、私はこの戦いにどうしても勝たなければならないんだ。」
「マリア…。」

彼女のその姿は祈っている様にも懇願している様にも見えた。
聖女自身、彼の生存を心の底から信じてはいないのだろう。
だが、それをわざわざ口にする事は憚られた。
二人の間に何とも言えぬ沈黙の時間が過ぎて行く。

ふと、聖女は夜空に輝く赤い月を仰ぎ見た。
その瞳はどこか不安気に揺れている。

「どうした？」

彼女はその問いに、小さく首を横に振る。

「…いや、何でも無い。
ただちょっと、誰かに呼ばれた様な気がして…。」
「ふぅん。案外、お前の兄貴が呼んだのかもしれないぜ。」
「……だといいがな。」

男の気休めに力なく答えて、聖女はソッと目を伏せた。

ルゥナ。
ルゥナリア。

どうか泣かないで。
笑っていて。

僕の何より大事な、可愛い妹。
君を守るためなら僕は…。

「……大丈夫。
ルゥナを傷つける奴は、ボクがみぃんなみぃんな、殺してあげるから…ね…。」

皇城の一室で小さな寝言が響いて消えた。
夜空に輝く赤い月が、割れた窓から静かに部屋を照らしていた。

それぞれの転機

「いい加減に起きて下さい、キョウ様。もうお昼近いですよ。」

彼女の声にピクリと身体を反応させた狂戦士はゆっくりと手で瞼を擦った後、未だ定まらぬ視界をリナの方へと向けて小さく呟いた。

「……ルゥナ？」

「っ寝ぼけないで下さい、キョウ様。
私はルゥナではなくリナです。」

名を間違えられた事に軽く苛立ちながら布団を捲る彼女に、ようやく意識がハッキリしたらしい狂戦士はなぜか怪訝な顔を見せる。

「え…、誰ルゥナって。リナ、何言ってんのー？」

「たった今、キョウ様がそうおっしゃったんじゃないですか。」

そのとぼけた返答に対し、リナは早くもある種の疲れを感じて肩を落としため息をついた。
これがわざとでは無く本気で言っているというのが、狂戦士のタチの悪いところである。

「知らないよー、聞き間違いでしょー？
もー、リナは本当どうしようもないなぁー。」
「なんでそうなるんですかっ。
もういいです。そんな事より食事の用意が出来ているので早く片付けちゃって下さい。」

逆に呆れた様な視線を返されて、理不尽な思いに囚われながらも彼の言動にこれ以上振り回されまいとリナは用件を告げる。
聖女討伐の命令が下ったのは、ちょうどその食事が終了したすぐ後のことだった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

廃墟と化したどこかほの暗い街跡を聖女は一人歩いていた。
ここは、数年前に狂戦士の手によって滅ぼされた海辺の小都市である。
多くの家屋は見るも無残に崩れ落ちており、ところどころに埋葬されぬまま白骨化した死体が転がっている。
そんな虚しい光景に、かつて貿易で栄えていた頃の面影は微塵も無い。
誰もいないはずのその場所で、聖女はどこか緊張した様子で辺りをキョロキョロと見回していた。

「うわっ、ホントにいたぁーっ！けきゃきゃきゃきゃ！」

と、そこへ遥か頭上から唐突に場にそぐわぬ笑い声が響く。
それに反応して廃ビル屋上へと顔を向ける聖女だったが、そうした次の瞬間には彼はもう彼女の目の前に立っていた。
咄嗟に距離を取りつつ、苦々しい表情で男の名を叫ぶ。

「…っ狂戦士！」
「ひひっ。お久しぶりぃー。会いたかったよ、せーじょさまぁー。なぁんてねぇーーっ！いひひひひひ！」

ケタケタと笑いながらも、狂戦士は獲物から目を放さない。
彼の血に飢えた野獣のような瞳は少なからず聖女に恐怖という名の感情を植え付けたが、彼女はそれを無理やり自分の中から追い払って皮肉気に笑い返した。

「あぁ。こちらこそ会いたかったぞ、狂戦士。
わざわざ殺されに出て来てくれて礼を言う。」
「あっひゃひゃひゃひゃ！何だか知らないけど、せーじょさまが吠えてるよぉーっ！
おっかしぃー！いひっ、いひひひひひひ！
前の時にぃ、痛めつけすぎて記憶でも飛んじゃったのかなぁー？カワイソーっ！
くふっ。ボクちん、親切だからぁ思い出させてあげるねー？」

狂戦士はそう言うと、何とも不気味な笑みを張り付けたまま聖女へ襲いかかった。
十メートルはあろうかという距離を一足飛びで詰めた彼は、その勢いで彼女の腹へ拳を振りかざす。
それを聖女は己の左拳で外側に弾き、反動で身体を捻らせながら狂戦士の左側面へ回り込んだ。
そのまま彼の背を右拳で殴り抜こうとするも、彼女と反対方向に身体を回した狂戦士の鋭い後ろ回し蹴りが迫り、殴る為の手を止め腕の肘を突き出して防御する。
足と肘のぶつかる衝撃を利用して少し聖女から距離を取った狂戦士は、不思議そうに首を傾げた。

「あれぇ、当たらないなー。」

心底理解出来ないといった表情の男を睨みつけながら、聖女はビシリと指を突きつけ声を張り上げる。

「人は誰しも成長する！
私が、組織の皆が、いつまでも弱者の立場に甘んじていると思ったら大間違いだ！
それをお前に…、帝国に教えてやるッ！」

駆け出して、聖女は狂戦士にラッシュを仕掛けた。
ただただがむしゃらだった以前とは全く違う研ぎ澄まされた攻撃

は、ときおり狂戦士の身を掠めて行く。
それらはほんの数秒で治る程度のささいな傷だったが、その数が増えるほど狂戦士はおかしくて堪らないといった風に声を大にして笑った。

「ひひ！いひひっ！はははは！あはははははは！あーっはははははははははは！」

まともに耳にすればいつか彼の狂気に引きずられてしまいそうで、聖女は息をする事も忘れてひたすら攻め続けた。
だが、それも束の間。時間が経過するにつれ狂戦士の動きはより鋭さを増していく。
いつしか攻守は入れ替わり、防御一辺倒になった彼女は段々と後方におされていった。

どれだけそんな状態が続いただろうか。

人の身を越えた者同士の壮絶な戦いに決着がついたのは、ほんの些細なきっかけからだった。
眉間に皺を寄せ歯を食いしばりながら猛攻に耐えていた聖女は、足元の瓦礫に気を取られ狂戦士の手刀を受けてしまう。
身を守るため咄嗟に構えた彼女の右腕は、皮一枚を残して大きく縦に裂けた。
大量の血液が噴出し、尋常でない痛みに襲われて思わず叫び声を上げる聖女だったが、しかし、彼女はそれをチャンスに変えるべく気力を振り絞った。

腕を大きく振り自らの血を彼の顔めがけて散布すると、避けきれず視界を奪われた狂戦士が反射的に身を固める。

「なっ！」

「今だ！ヤレぇぇぇぇぇぇぇッ！！」

その姿を後目に空高く飛び上がった彼女の叫びとほぼ同時に、彼女の真後ろにあった建物から爆音が轟いた。

一瞬の間を感じる隙も無く、壁を突き破って飛んで来たソレに狂戦士はなす術も無く蹂躙される。

彼の首から上を構成していたものがてんでにばらばら飛び散って、それから、全身がグラリと背面に傾(かし)い倒れる。

拍子に、地面に溜まっていた砂埃が舞い上がった。

また、広く散った彼の肉片の中に奇妙な黒い金属の様な物体が混ざっていたのだが、あまりの小ささゆえ誰の眼に止まる事も無いままソレは瓦礫の隙間に消えて行った。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

少しばかり時は遡る。

反帝国組織のあるアジトでは、実行を目前にした計画の最終確認のため主立った人間が集められていた。

緊張した面持ちの者、ソワソワと落ちつかな気に身体を動かす者、極めて冷静沈着な者、どこか浮ついた雰囲気を纏う者、苛立つように足を揺すっている者など、それぞれ様々な様相を呈している。
聖女もまた神妙な面持ちで腕を組み、ときおり人差し指をトントンと二の腕に打ち付けていた。
と、そこへ一人の青年が現れると、皆は一斉に待ちわびたような視線を向けた。
通信兵である青年はそれに構わず、淡々と己の役割をこなす。

「別動隊、配置完了の報告が入りました。」
「順調だな。帝国はどうだ？動きはあったか？」
「未だ会議が続いているようです。」
「そうか。まぁ、現時点で計画は続行だ。
兵器部で待機している奴らにも状況を伝えておけ。」
「ヤー。」

右拳を心臓の上にかざし左足の踵で地面を鳴らすという組織内で定められている敬礼の形を取ると、通信兵はきびきびと部屋から去って行く。
会話を追えた幹部の男に、仲間の一人である筋骨隆々な肉体と整えられた口髭が特徴的な壮年の男が眉間に皺を寄せながら唸る様な声で話しかけて来た。

「…しかし、情報を流したからと素直に狂戦士がおびき出されてくれるものか？」
「問題ない。例え罠だと知っていたとしても、マリアを葬るまたと無いチャンスなんだ。

それを、みすみす逃したりはすまい。…帝国側も後がないからな。」
「ここで万が一にも失敗すれば、後がないのはむしろ僕達の方なんですけどね。」

二人の会話に、いかにも頭脳労働担当といった風情のメガネをかけた青年が割り込んで来る。
小難しい表情で目を瞑っている彼の方へと顔を向けた幹部の男は、慎重に頷いて、それから全員に視線を巡らせた。

「我々にとっても此度の作戦は大きな賭けである事を忘れてはならない。
…ここが平和を勝ち得るか否かの正念場だ。何が何でも狂戦士を亡き者にするぞ！」

力強い彼の宣言にそれぞれがそれぞれの言葉で了承の意を示すと、場はにわかに活気づいた。
直後、帝国に動き有りの報告を受けて、彼らは精悍な顔つきで足早に会議場を後にする。
それに追従する聖女は、出口の程近くで背後から幹部の男に声をかけられ振り向いた。
中途半端に伸ばされた男の手を怪訝そうに見つめながら、彼女は首を傾げて問いかける。

「どうした。今さら役割の変更なんてのは無しだぞ？」
「いや、それは無い。無いんだが…。

マリア。この作戦の要(かなめ)はお前だ。
これは周知の事実であり、お前自身誰よりそれを感じているだろう。」
「……まぁ、そうかもな。」

聖女は彼が今さら口にするまでも無い無益な話を切り出した事を訝しく思いながら、曖昧に頷き肯定する。
しかし、彼はそんな聖女の様子を気にせず話を続けた。

「だが、失敗を恐れる事は無い。
先程は皆を鼓舞するためにああ言ったが、お前が生きてさえいれば再びチャンスもあるだろう。
こちらには対バイオコマンド用の新兵器があるんだ。いざとなれば倒せずとも逃げる事くらいは出来る。」
「…何？」

それを聞いて、聖女は大いに顔を顰めた。
男のそのセリフは言外に彼女自身に対する信頼が低い事を告げているようで、酷く不快な気分にさせられる。
彼女の機嫌が下降したのを見て取るや、彼は慌てた様子で首を横に振った。

「あぁ、いや。そういう意味じゃないんだ。そうじゃなくて。
何が言いたいかというと、その…、奴に復讐する機会はこれ一度きりじゃ無い。
だから…、まぁ、何だ。

……気負いすぎるなよ、マリア。」

俯き加減に頭をガシガシと掻きながら吐き出された予想外の言葉に、聖女は先程顰めた顔を緩ませキョトンとした瞳を向ける。
いたたまれないのか、男は彼女の視線から背を向けガンと拳で壁を殴りつけて叫び出した。

「っだー、クソ！こんなのは俺のキャラじゃねぇんだよ、畜生！」

男が羞恥に悶える様を見ていた聖女の胸の内に、ジワジワと可笑しさが込み上げて来る。
どうやらこの男は、命の危険性のある重要任務を前にした彼女の気を柄にもなく解そうとしてくれているらしい。
自身の口に手を当てて何とか堪えようとするが、情けなく取り乱す彼の姿を前に彼女はついに腹を抱えて笑いだしたのだった。

～～～～～～～～～～

水に極限まで圧力をかけて撃ち出すその兵器は、分厚い鋼鉄をも穿つ力を持つ。
欠点は、次を撃ち出せるようになるまでに十五分という戦いにお

いてはけして短くない時間を要する事と、兵器自体が巨大すぎる事にあった。
縦横共に二メートル近くあるそれは当然重さも相応で、鍛えられた肉体を持つ成人男性が少なくとも五人以上はいなければ持ち上げる事も叶わない。
ゆえに、彼らに与えられたチャンスはたった一度きりであった。
外してしまえば次を待つ間も無くその場の人間は全て数秒の内に葬られ、どころかせっかくの兵器さえも破壊されてしまうだろう。
狂戦士がいる限り皇城は墜ちない。
よしんば皇帝の首を取ったとしても、主を失った狂戦士がこれまで以上に殺戮の限りを尽くすようになってしまうのは想像に難くない。
だから、彼らは彼ら自身の切り札でもある聖女をおとりに使う事を決意したのだ。

しばしの間の後、盛大な歓声が上がった。

「あああああ！やった！ついにやったぞぉぉおおおおお！」
「ざまあみろ狂戦士！ざまあみろ死神皇帝ぃーーーーッ！」
「うぉぉぉおおお！
ジョッシュ！ミリアン！トニー！バーネス！ダリア！マイケル！
それから、みんな！
ようやく仇を…、仇を取ったぞ！」
「これで帝国も終わりだ！我々の勝利は約束された！」

彼らの声を聞きながら、聖女は地面に片膝をついた状態で静かに身を回復させている。

腕の痛みがあってか笑みこそしていないが、その表情はどこか満足気であった。
そんな彼女の前方に一人の男がしゃがみ込んで話しかけて来る。

「マリア、怪我の具合はどうだ？すぐに動けそうか？」
「…問題無い。傷を負ったのは腕だしな。
完全に千切れてしまったワケで無し、この程度なら移動中にでも治るだろう。」
「そうか。」

互いに頷き合うと、次いで男はスクリと立ちあがり湧き立つ面々に注意を促した。

「おい、お前ら！喜ぶのは分かるが、今は急いで別動隊と合流するぞ！
せっかく狂戦士を倒してもあっちが負けたんじゃ元も子もねぇ！」
「おぉ、そういやそうだったな！行こうぜ、みんな！」
「よぉし！帝国兵の奴らにも、俺たちの力を思い知らせてやろうぜ！」

男の言葉に対し、そこかしこから同意のセリフが返って来る。
そうして彼らは勝利の余韻に酔いしれたまま、新たな戦場へと移動を開始した。

失われた場所が頭部のような繊細な場所ともなれば、復元にも時

間がかかる。
よくよく観察すれば狂戦士の首元が再生の為に小さく蠢いている事が分かったはずだが、すでに彼らの思考は別の場所に向いていたため、誰一人それに気がつかない。
帝国側と違い正確なバイオコマンドの性質を理解していない反帝国組織の面々は、彼の死を疑うことなくその場を後にするのだった。

それから数時間が経過した夕暮れ時の事。
誰もいなくなった街の傍らで、廃墟の隙間を抜ける風が嘆くように声を上げていた。

再生が終わらず未だ地に伏したままの狂戦士の身体に細かな砂埃が集っている。
グチュグチュと少しずつ脳を再生させながら、戻ったばかりの彼の二つの目玉が虚ろに光った。

「……ル…ゥ……ナ…。」

どことなく悲しげな彼の囁きを聞く者は無く、その音は風と共に舞い虚空に溶けていく。
修復中の個所から流れ続ける自らの血液が、冷たく頬を濡らしていた。

～～～～～～～～～～～～

皇城で狂戦士の部屋を整えていたリナは、扉の開く音を耳に入れて笑顔で振り向いた。
誰に禁止されているわけでも無いが、わざわざ危険と知るこの場所に自ら足を踏み入れようなどという無謀な輩は一人もいない。

「キョウ様、おかえりなさいっ。
今回もご無事でようございました。」
「…うん。ただいま、リナ。」

後ろ手にドアを閉じどこか理知的な瞳で微笑む己の主人に、彼女は言い知れぬ違和感を覚えて眉を顰める。

「キョ…ウ…様…？
…ううん、そっくりだけど……違う？
貴方、誰っ？キョウ様はどうしたの！？」

叫んで、リナは困惑と恐怖の混じる表情を浮かべ大きく後ずさった。

狂戦士は脅える彼女に困った様な笑みを返す。

「僕がその狂戦士だよ、リナ。
脳を一度全て破壊されたからか、以前の…人間だった頃の記憶が戻ったんだ。」
「のっ…！そんな！大丈夫だったんですか！？」

一気に顔を青くして心配そうに駆け寄って来るリナ。
別人かもしれないと疑っていた事をあっさり忘れて無防備な姿を見せる彼女に、狂戦士は苦笑いを隠せない。
二度ほど呼吸を繰り返してから、彼はリナに優しく語りかけた。

「心配してくれて、ありがとう。見てのとおりピンピンしてるよ。
…それより、リナ。聞いて欲しい話があるんだ。」

リナの肩に手を置き、神妙な顔つきで彼女の瞳を真っ直ぐ見つめる狂戦士。
その姿に、リナは何とも言えぬ戸惑いを覚えて不安げな顔を覗かせた。

人間であった頃の記憶が戻ったという事は、もう自分の主人であったあの狂戦士はどこにもいないという事なのだろうか。
迷惑ばかりかけられていたが、彼女を救い、彼女という存在を求めてくれたのは彼だけだったのに…とリナは思う。
入れ物が同じだけの見知らぬ他人になってしまった狂戦士を前に、

彼女は胸の内がツキリと痛むのを感じていた。
こちらの顔を見上げたままどこか遠くに意識を飛ばすリナに痛ましげな視線を向けながら、彼は静かに呼びかける。

「リナ…。」
「っあ。も、申し訳ございません。
それで、話とは何でしょうか。」

リナはその呼びかけにハッとした表情で返事をする。
特に彼女の態度を追及する事もなく、狂戦士は少しばかり申し訳なさそうな顔で言った。

「うん。ちょっと長くなるんだけど、どうしても君には聞いてもらわないといけないんだ。
今までの事と、そして、これからの事……。」

しかしてその後、リナが新しいゼルナリオと名乗る男を受け入れるまでに、そう時間はかからなかった。
元々、人から与えられる優しさというものに飢えていた少女が、まるで血の繋がった家族であるかのように慈愛を持って接されたとあれば、その心地よさに絆されるのも無理からぬ事である。
さらに、彼は彼女以外の人間の前では依然と変わらぬ狂った自分を演じ続けていた。

リナだけがゼルナリオの秘密を知っている。
その事実は、リナにまるで彼女が彼の特別な存在にでもなったかのような錯覚を抱かせた。

どんなに中身が変わろうとも、彼がリナの狂戦士であり唯一の主人であり心の拠り所である事実に変わりは無い。
だから…と自分自身に言い訳をして、リナは彼がただの狂戦士だった頃にはけして抱かなかった淡い感情を密かに胸の内で育て始めるのだった。

それぞれの転機（後書き）

次話、最終回です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1122x/

帝国の狂戦士は反帝国組織の聖女を殺したかった

2011年10月24日18時10分発行